

機関番号：32618

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520101

研究課題名 (和文) 中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響に関する基礎研究

研究課題名 (英文) Studies on influence of the Crusades in Late Medieval illuminated manuscripts

研究代表者

駒田 亜紀子 (KOMADA AKIKO)

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00403866

研究成果の概要 (和文)：本研究は、13 世紀後半にパリで成立した初の仏語完訳聖書『十三世紀フランス語聖書』写本を通じて、ラテン国家滅亡後に西欧彩飾写本に及んだ十字軍遠征の影響を考察する。同写本の制作・流通は比較的短期間に留まったものの、仏語使用圏を越える特異な伝播形態をとった。こうした特異な伝播は十字軍参加君公の間でのフランス語聖書の需要と文化的交流に依るとの仮説に基づき、十字軍遠征がフランス語聖書写本の展開に及ぼした影響の解明を目指す。

研究成果の概要 (英文)：The present research is to study, through the manuscripts of the « *Bible française du XIIIe siècle* », the influence of the Crusades on development of illuminated manuscripts in Occident of Late Middle Ages. This *Bible* is the first complete version of French translation ; its diffusion goes beyond the linguistic boundary of French, in spite of its short period of diffusion. Our hypothesis is that such a specific diffusion depends on the demand on French Bible and on cultural exchange between princes and chevaliers Crusaders.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：分科 哲学 細目 美学・美術史

キーワード：美術史、彩飾写本、聖書、中世フランス語文学、十字軍国家、キリスト教、図像学、様式分析

1. 研究開始当初の背景

1096年から1291年までの約200年間に8回にわたり行われた十字軍遠征が同時代の美術に及ぼした影響については、過去半世紀以来、建築・彫刻・絵画(写本彩飾)などの

分野において研究が進められてきた。これに対し、1291年のラテン国家滅亡後の西ヨーロッパ芸術に十字軍遠征が及ぼした影響・余波に関する研究は、特に、13世紀末以降の中世後期の彩飾写本については、幾つかの個別作

品を除き、十字軍遠征の直接的あるいは間接的な影響について議論すること自体、ほとんど無かったと思われる。

こうした研究状況に鑑み、研究代表者は、13世紀末以降に十字軍遠征の影響あるいは余波の下に発展したと推定される彩飾写本のジャンル・主題系列を抽出した上で、それぞれの系列に属する彩飾写本を一つのグループとして比較考察することにより、中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響の諸相を明らかにしたいと考えた。本研究では、こうしたグループの中から、30点前後の作例が現存する『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』写本群を取り上げることとした。

2. 研究の目的

『十三世紀フランス語聖書』に関する研究は、文学・文献学サイド主導により進められてきた。これらの研究は、写本テキストの分析を通じて、現存する30点前後の写本間の伝承系統などを明らかにしつつあり、その成果は美術史研究にも寄与するところが大きい。その一方で、これらの研究においては、主として挿絵装飾の様式分析を通じて可能であるところの各写本の制作年代・制作地の同定、あるいは挿絵図像の比較考察を通じた各写本間の影響関係などの考察には、限界があることは否めない。

『十三世紀フランス語聖書』のコーパスは約30点と小規模であり、制作時期も比較的短期間(13世紀最終四半期から14世紀初頭)であったにもかかわらず、その地理的起源はフランス語使用圏を超えて広範囲に及ぶ。これは、14世紀初頭以降16世紀初頭に至るまで『十三世紀フランス語聖書』を市場から駆逐するように長期にわたる爆発的な普及を見た『歴史物語聖書 *Bible historiale*』の現存写本約120点の大半がパリ起源であることとは対照的である。『十三世紀フランス語聖書』が比較的短期間にフランス語文化圏を超えて普及した要因の一つとして研究代表者が重視するのは、十字軍国家に参加した君公たちの交流である。『十三世紀フランス語聖書』写本のうちパリで制作されたと見られる1点については十字軍国家との関係が示唆されているものの、作品の普及・伝播やその彩飾に携わった画家たちに十字軍遠征が及ぼした影響や余波を美術史的観点から論じた研究は、申請者の知る限り行われていない。本研究課題では、以上の観点から、『十三世紀フランス語聖書』写本を捉える新しい視座を提示したいと考えた。

3. 研究の方法

本研究の実施にあたっては、主に以下に掲げる4項目のアプローチを研究の基盤とした。

- (1) 作品調査および資料収集：
 - ① 一次史料である写本作品を所蔵する海外の図書館・研究機関等における実地調査。ただし、必要と想定される実地調査を単年度内にすべて行うことは不可能であるため、複数年にわたり順次行った(主要な調査対象:『十三世紀フランス語聖書』写本: Paris, Bibliothèque nationale de France, m s.fr. 899, ms.fr. 12581; Oxford, Christ Church, ms. 178; New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 494; Bruxelles, Bibliothèque royale, ms. 10516; St-Omer, Bibliothèque de l'Agglomération, m s. 68; London, British Library, Add. ms. 40619-40620; その他の写本: Boulogne-sur-Mer, Bibliothèque municipale, ms. 4 & Arras, Bibliothèque municipale, ms. 1; Oxford, Keble College, ms. 69; New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 109-111; Brugge, Groot Seminarie, ms. 4/1 & 5/191; Bruxelles, Bibliothèque royale, m s. II 2523, ms. 18295; Paris, Bibliothèque nationale de France, m s.fr. 6447, nouv.acq.fr. 23686, ms. fr. 779, ms.fr. 1610)
 - ② 写本作品を撮影したカラースライド、焼付け写真、マイクロフィルム、デジタル画像、高精度複製本(ファクシミリ版)等による、写真・画像資料の収集および調査。
 - ③ 写本作品に関連する二次史料および研究文献の探索・収集。写本作品の起源・伝来を明らかにするための二次史料、写本作品に関する各種の基礎データを確認するための所蔵機関の写本目録、研究文献を収録する雑誌・書籍には、日本国内では閲覧あるいは複製の入手が不可能なものも少なくない。①の作品実地調査に際しては、所蔵研究機関における二次史料や研究文献の調査・収集も平行して行った。
- (2) 個別の写本作品の制作地・制作年代、伝来等の解明:挿絵彩飾の様式ならびに図像の比較分析や作品伝来に関する一次・二次史料の分析、文学・文献学サイドの研究より提出された写本伝承系統に関する仮説との照合等を通じて行う。
- (3) 13世紀後半~14世紀前半の『十三世紀フランス語聖書』とラテン語聖書写本

との比較分析: 十字軍遠征に多くの君公を送り出した北フランスおよび南ネーデルラント地方で制作されたラテン語聖書には、13世紀パリを中心に普及した小型の携帯用聖書とは異なり、大型の豪華な作例が少なくない。北部地方の由来と推定される『十三世紀フランス語聖書』との比較分析を通じて、挿絵彩飾の様式や図像に共通する特徴の有無やその実態を探求する。(主要な写本作品: 《テウトン(ドイツ) 騎士団の聖書》、《テル・ドエストの聖書》、《ライランズ=グラツィエの聖書》、《マルケットの聖書》ほか)。

- (4) 13世紀後半～14世紀前半のフランス語世俗写本作品との比較分析: 主な対象としては、聖地ラテン王国で広く人気を博したティルス大司教ギヨーム著『ラテン王国年代記』仏語訳写本、同じく聖地ラテン王国で普及した『カエサルまでの古代史(世界年代記)』など。十字軍遠征に参加した君公の間で普及したこれらの写本作品と同じく彼らの間で普及の糸口をつかんだと考えられる『十三世紀フランス語聖書』写本との比較分析を通じて、挿絵彩飾の様式や図像に共通する特徴の有無やその実態を探求する。

4. 研究成果

- (1) 『十三世紀フランス語聖書』最初期の作例の制作年代について

『十三世紀フランス語聖書』成立期の様相の一端を明らかにすべく、現存する最初期の作例に関する論考を公表した(雑誌論文)。これは、文学・文献学サイドにおいて進められてきた先行研究において『十三世紀フランス語聖書』の現存する最初期の作例と考えられてきたフランス国立図書館フランス語899番写本に加え、19世紀末の目録の記述の誤りにより長らく15世紀の作例とされてきたものの管見によれば上記のフランス語899番写本と同時代もしくは年代的に先行すると考えられるエヴォラ所蔵写本(Evora, Biblioteca Publica e Arquivo Distrital, cod. CXXIV/1-1)をとりあげ、両写本の彩飾の様式分析を通じて、特に13世紀パリ写本彩飾研究においてもこれまで取り上げられることの無かったエヴォラ写本の制作地・制作年代そして様式的系譜・帰属を明らかにするものである。すなわち、フランス語899番写本は13世紀第3四半期のパリ写本彩飾において主導的な立場にあった写本彩飾工房の一つ(バーリ・アトリエ)の比較的後期の作例(1270-75年)と考えられるのに対して、エヴォラ写本は、同じく13世紀第3四半期のパリ写本

彩飾において活発な創作活動を行った写本彩飾工房(デュ・ブラ・アトリエ)に帰属すべき作品であることを新たに指摘し、(デュ・ブラ・アトリエ)の活動期間を1250年代以降とする近年の論考に鑑み、本写本の制作時期をフランス語899番写本よりも早い1260-70年代とすることを提案した。また、エヴォラ写本の挿絵を作成した(デュ・ブラ・アトリエ)は、フランス語899番写本の挿絵を担当した(バーリ・アトリエ)と並び、ラテン語による典礼書や1巻本あるいは複数巻構成のラテン語聖書から世俗写本に及ぶ多彩なレパートリーを展開し、13世紀第3四半期のパリにおける写本彩飾の「平均的」あるいは典型的な様式傾向を代表するアトリエであることを、改めて指摘した。

本論考の『十三世紀フランス語聖書』写本研究における位置づけ・インパクトとして、以下の点が上げられる。①従来の研究ではその重要性が等閑に付されてきたエヴォラ写本の制作年代および様式的系譜について新しい知見をもたらし、フランス語899番写本を現存最古の作例とするこれまでの研究に根本的な再考を促すものであること、②従来の文学・文献学サイドにおいて進められてきた先行研究においては全く考慮されなかった『十三世紀フランス語聖書』の第一世代とも呼ぶべき両写本の制作・受容の *milieu* の一端を明らかにしたこと、である。

本論考の成果に基づく今後の研究の展望としては、以下の点が上げられる。①本論考では論じることができなかったが、(デュ・ブラ・アトリエ)の活動後期の様式に関連する作品の中に、2点のティルス大司教ギヨーム著『ラテン王国年代記』仏語訳写本2点(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 2603, ms. fr. 24208)が含まれているという事実は、『十三世紀フランス語聖書』成立期の所有者や受容環境を探求する上で、貴重な手がかりを提供すること、②13世紀を通じて進行しつつあった、世俗の写本挿絵工房における聖書図像の展開と受容層の量的・質的な拡大、換言すれば聖書図像の需要(受容)・供給体制の変革に関する考察の推進、である。

- (2) 『十三世紀フランス語聖書』(パリ-アッコンの画家) 帰属写本について

『十三世紀フランス語聖書』と十字軍遠征および聖地ラテン王国との関わりを具体的に探る上で鍵となる、ニューヨークのピアポイント・モーガン図書館所蔵の作品(New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 494)に関する論考を公表した(雑誌論文)。本作品は、1280年代初頭までパリで活躍し、その後、十字軍国家の最後の拠点となった聖地パレスティナのアッコンにおいて活躍したこと

なみくパリ-アッコンの画家(=聖ヨハネ騎士団の画家)と命名された、逸名の写本彩飾画家による作品である。同画家は、十字軍遠征中のルイ9世のために1250-54年頃アッコンで制作されたパリのアルスナル図書館所蔵の『フランス語旧約聖書《アッコンの聖書》』(Paris, Bibliothèque de l' Arsenal, ms. 5211)と同じ写本テキストによるフランス国立図書館所蔵の1280年代初頭アッコン制作の『フランス語旧約聖書』(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. nouv. acq. fr. 1404)の挿絵に加え、当時の世俗写本における聖書図像の広範なレパートリー源の一つでありパレスティナで人気を博した『カエサルまでの古代史(世界年代記)』の挿絵も複数の写本において手掛けるなど、十字軍国家とフランス語聖書写本とを直接につなぐ、数少ない貴重な証人の一人である。また、モーガン図書館所蔵『十三世紀フランス語聖書』M. 494番写本は、先に言及したフランス語899番写本やエヴォラ写本が旧約・新約聖書の一部テキストのみを収録する(収録テキストに欠落のある)作例であるのに対し、現存する最古の完本の一つとしても貴重な作例である。文学・文献学サイドの研究においては1960年代より言及されるようになるが、その挿絵装飾が美術史学研究においても議論されるようになったのは、1990年代以降のことである。しかし、これまでの美術史サイドの研究においては、同写本の挿絵を担当した2ないし3人の画家の様式的帰属について簡単に言及するにとどまり、同写本における〈パリ-アッコンの画家〉の挿絵彩飾の様式的特色ならびに挿絵図像に関する本格的な考察はなされてこなかった。

こうした研究状況に鑑み、本論では、モーガン図書館所蔵の『十三世紀フランス語聖書』M. 494番写本を通じてこの画家のパリにおける1280年代初頭までの初期活動の一端を明らかにし、同時に、13世紀最終四半期に北フランスのアルトワ地方で制作されたラテン語聖書写本の挿絵彩飾との比較を通じて、従来の研究ではほとんど論じられてこなかったこの画家の様式的出自を解明する新たな手がかりを指摘した。挿絵図像に関しては、M. 494番写本中の〈パリ-アッコンの画家〉担当部分は、同画家が1280年代初頭(すなわちM. 494番写本の完成後間もなく)聖地アッコンにおいて手がけたフランス国立図書館所蔵の『フランス語旧約聖書』の挿絵と共通の図像モデルに依拠していることが判明した。一方、M. 494番写本は、イニシャルや余白装飾などの二次的装飾のレパートリーに関しては、アッコン特有の二次的装飾を展開するフランス国立図書館所蔵の『フランス語旧約聖書』や同画家が1280年代初頭まで活動したパリの同時代の写本彩飾には見られない特徴的なモチーフ

フを提示する。これらのモチーフに酷似する作例は、1260-80年代にかけてカンブレ、アラス、リール等の北フランスないしはフランドルの諸都市で制作された一群の彩飾写本、なかでもラテン語聖書や典礼書に頻出するモチーフであることを新たに指摘し、いまだ謎に包まれている〈パリ-アッコンの画家〉の様式的出自がフランス北部地方にあることを示唆した。

本論考の中世フランス語聖書写本彩飾研究ならびに中世後期の西ヨーロッパ写本彩飾に対する十字軍遠征の影響に関する研究における位置づけ・インパクトとしては、①西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響を直接に体现する〈パリ-アッコンの画家〉のパリにおける最も重要な帰属作品であるM. 494番写本の詳細な分析を通じて、同画家の聖書挿絵レパートリーの図像学的特質を明らかにしたこと、②未だに謎の多い同画家の様式的出自を解明する上で有力な論拠を提出したこと、である。

また、本論考の成果に基づく今後の研究の展望としては、以下の点が上げられる。①〈パリ-アッコンの画家〉の様式的出自に関わりの深い北フランス地方の同時代の彩飾写本との比較考察を通じて、十字軍遠征が西ヨーロッパ彩飾写本にもたらした影響・余波をより具体的な相の下に解明するためのさらなる手がかりを提供する。②14世紀初頭以降、フランス語聖書写本の市場から『十三世紀フランス語聖書』を駆逐することになる『歴史物語聖書』が北フランス・アルトワ地方で編纂されたのはアッコン陥落の年1291年であるが、これは、十字軍国家の陥落が不可避となったこの時期にフランス本土、中でも十字軍遠征に君公を多数送り出したフランス北部地方において、フランス語聖書の新たな需要が高まったことを示唆する。その意味で、十字軍国家の写本彩飾において独特の位置を占めた〈パリ-アッコンの画家〉が、彼我において2種類の異なるフランス語聖書、すなわち『十三世紀フランス語聖書』M. 494番写本とフランス国立図書館所蔵の『フランス語旧約聖書』の制作に携わったという事実は、この時期のフランス語聖書のフランス本土なかでも北部地方における需要あるいは市場のありようを探る上で、更なる手がかりを提供する。

(3)『十三世紀フランス語聖書』フランス北部の作例と〈パリ-アッコンの画家〉との関係について

研究成果(2)に引き続き、1291年のアッコン陥落を前にしたラテン王国最終局面(1280~1290年頃)において十字軍遠征が中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に及ぼした影響を明らかにするため、1280年代に北フランスで制作された2点の『十三世紀フランス語聖書』(

Bruxelles, Bibliothèque royale, ms. 10516; St-Omer, Bibliothèque de l'Agglomération, ms. 68) に関する論考を発表した(雑誌論文)。本論では、これまで美術史学分野においては散発的な言及を除き本格的な研究は発表されてこなかったこれら2点の写本作品について、<パリ-アッコンの画家(=聖ヨハネ騎士団の画家)>と命名された逸名の写本彩飾画家の影響下に制作されたことを、明らかにした。さらに、これら2写本(いずれも『十三世紀フランス語聖書』後半部を収録)は、福音書冒頭の挿絵<エッサイの樹>図像において、1280年代にイングランド王子とホラント伯娘の婚約を記念して制作されたと推定されるケンブリッジ所蔵の『詩篇集』や同じくイングランド制作の『十三世紀フランス語聖書』(London, British Library, Add. ms. 40619-40620)、さらには1260年代制作の北フランス・カンブレ制作の『朗読用福音書』(Cambrai, Bibliothèque municipale, ms. 189)中の同主題の挿絵図像と密接な関係を有することを指摘し、『十三世紀フランス語聖書』が十字軍遠征に深い利害関係を有した英仏海峡を挟む諸州に普及・伝播した背景やその影響の一端を明らかにした。

本論考の中世フランス語聖書写本彩飾研究ならびに中世後期の西ヨーロッパ写本彩飾に対する十字軍遠征の影響に関する研究における位置づけ・インパクトとしては、次の点が上げられる。①文学・文献学サイドの研究において、『十三世紀フランス語聖書』の写本伝承系統(リセンション、ステマ)上、失われたオリジナル写本に非常に近くかつ相互に密接な関係にあるとされるサン・トメール写本ならびにブリュッセル写本に関して、その制作地ないしは挿絵彩飾の地理的起源・出自を明らかにし、なおかつ挿絵彩飾の様式ならびに図像学的特徴という美術史学的見地からも非常に近い関係にあることを論証したこと、②美術史研究において等閑に付されていたこれら2写本の挿絵彩飾と、十字軍遠征と西ヨーロッパの彩飾写本の架け橋を体現した<パリ-アッコンの画家>挿絵彩飾との密接な関わりを明らかにしたこと、である。

また、本論考の成果に基づく今後の研究の展望としては、以下の点が上げられる。①『十三世紀フランス語聖書』の初期段階の普及・伝播においてフランス北部地方の果たした役割をより具体的な相の下に明らかにするための手がかりを提供する、②十字軍遠征が『十三世紀フランス語聖書』の普及・伝播に及ぼした影響や余波をさらに具体的に考察する視座の提示、である。

なお、本研究の成果のうち、平成22年度中に発表できなかった成果の一部は、平成23年7月2日に京都大学で開催される日仏美術

学会第118回例会にて口頭発表するほか、平成23年度中に投稿・刊行予定の雑誌論文において、引き続き発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 駒田亜紀子「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究: フランス北部の作例と<パリ-アッコンの画家>をめぐって」: 『実践女子大学美術学』(査読有) 25 (2011)、p.(17)-(38). (機関リポジトリ Cinii)
- ② 駒田亜紀子「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究: <パリ-アッコンの画家>帰属作品について」: 『実践女子大学美術学』(査読有)、24 (2010)、p.(39)-(55). (機関リポジトリ Cinii)
- ③ 駒田亜紀子「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究: 最初期の作例について」: 『実践女子大学美術学』(査読有)、23 (2009)、p.(39)-(53) (機関リポジトリ Cinii)

[学会発表] (計2件)

- ① 駒田亜紀子「中世後期のフランス語聖書の展開」 於: 中央大学人文科学研究会発表、2011年5月14日、中央大学後楽園キャンパス
- ② 駒田亜紀子「中世フランス語聖書彩飾写本の地域的展開」 於: 新約聖書図像研究会 (NTIS) 発表、2008年12月13日、立教大学池袋キャンパス

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

駒田 亜紀子 (KOMADA AKIKO)

実践女子大学文学部美学美術史学科・准教授

研究者番号: 00403866

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：